

元代における収継婚考

大島 立子

元朝の家族に関わる諸法律の多くは基本的には「唐律」に則っていた¹。法は政権や統治者の目指す社会秩序の安定に必要とされる規定である。「唐律」の家族に関わる諸法律についても同じ目的をもって作られ、宋朝において引き継がれ、その後の王朝時代を通じて漢族の理念となったと考えられる。しかし「唐律」の家族法はモンゴル民族政権下の元代では弛緩していたとみられることは多い。なかでも親族の寡婦を妻とする収継婚²の許容が第一にあげられる。

収継婚は匈奴の時代から漢族が批判してきた北方民族の結婚の風習であり、金朝を開いた女真民族も元朝のモンゴル族もこの習俗を持っていた。漢族と北方民族の文化を分けるものと見られ、漢代に収継婚は禁止され、「唐律」に受け継がれ、それを踏襲した宋代も禁止した。すなわち「違反すれば、高祖から同宗の配偶者との結婚は杖一百であり、なかでも總麻以上であれば徒一年、さらに小功以上であれば、婚姻の違反としてだけでなく、姦罪として扱う³」という。また当時の姦罪の量刑は徒一年半、有夫の場合は二年、總麻以上の親族との姦は三年である⁴。元代においては、總麻は父方の曾祖父を同じとする父の排行の妻、母方の祖父を同じとする母の排行の妻、自らの従姉妹の嫁、再々従兄弟があたり、小功は母の従兄弟、父の従兄弟、自身の従姉妹の嫁、兄弟の妻である⁵。すなわち「唐律」と同じに考えれば、兄弟の妻を収継することは姦罪として扱われることになる。

しかし元代では長く収継婚は許容された。また明清時代にも禁止されたがなくなかったと言う。⁶「唐律」を逸脱した形態であるためか、元代の収継婚については多くの研究者が注目し、実態を紹介し、モンゴルの風俗に倣った結果と言う。近年は収継婚の容認は経済的な理由から漢人社会の側に受け入れる要素があつたと指摘することも多い。しかしおおかたは実態を述べるに過ぎず、原因となる事象の追究は不十分である⁷。モンゴル民族の風習から元代に漢族にも収継婚が許されていたのは確かであるが、それを許容する要素が漢族の側にはなかったのか、最初に元代の収継婚に関わる法を整理し、それを手がかりに考察したい。

一 元朝における法制定

モンゴル政権には太祖チンギスが制定した大ヤサといわれた法があり、太宗オゴタイ、定宗グユック、憲宗モンケ、世祖フビライ以下の皇帝も遵守した。しかしこれは定住民族を支配するための法ではなく、いわゆる統治機構やそれにもなう制度でもない。そこで世祖は即位三年後の中統三（一二六二）年、漢人の史天澤と姚樞に法の制定を委ね、至元八（一二七二）年には統治機構がまとまり、発令された⁸。従つてその多くは漢族が培つてきた制度や規定に基づいたものである。この至元八年に発布された法はまとまって残されてなく全容を知ることができない。しかし『通制條格』・『元典章』・『元史』によつて類推することはできる。『通制條格』・『元典章』に見られる八年に発布されたとする法、またそれ以前に規定された法も、これらの法典にあるところから至元八年に認可された法として解釈してよからう。この年十一月、大元として建国宣言をし、モンゴル

時代に入っても判決などの基準としてきた金の泰和律の使用を禁じた⁹。律だけでなく金朝以来踏襲、参考にしてきた法全般が禁止の対象であろう。

元代の法は基本的には民族を越えて統治下の全ての人々が守るべきものであった。しかし各民族の慣習に関わるものは、時に「本俗法に従う」と付記され、あるいは該当民族名が明記されている。家族のありかたを示す婚例、葬例などの法がこれに該当する。もつとも至元八年の家族に関する法は漢族社会に向けてのみ制定された。もともと彼らには知るよしもないモンゴル人に対しての法を作ろうとしていたわけではない。それ故に「嫁娶聘財體例」に蒙古人について「蒙古人はこの例にあらず」と付記したのである¹⁰。なお漢人にとっての「本俗法」とは「唐律」を基準したものである。

同じ非漢族の王朝である遼朝では、太祖の時に「漢人ならば律令で裁く」との詔が出、また太宗の時に「渤海人は漢族の法すなわち律令で治める」とある¹¹。また金朝でもこれは引き継がれた。それは『通制條格』・『元典章』に見える泰和律に言及する規定から知ることができる。しかし漢族や渤海人に律令を厳守することを命じているわけではなく、女真族の法に反しなければ許容された。たとえば家族のあり方の根幹と思われる別籍や財産分与について、「唐律」では全く禁止したが¹²、金代の泰和律では「漢人は子孫を別籍してはならないが、財産を分けることは許す¹³」と緩やかにしている。この法が定着し、「唐律」にもどすことは困難であった。そのため元代に新たに別籍・異財に関わる法を作る際に、「時代が異なるので『いにしえの法を参照し、現在の状況に合わせる』べきとし、金代の法を踏襲し、祖父母・父母の許可があれば別籍・異財を許した¹⁴」と言う。しかし金朝に弛緩したことだけが変質の原因であろうか。もともと唐の法が一般庶民の生活と乖離していたと

も考えられる。宋初に「人々が祖父母・父母が健在であるのに、別籍・異財し、同居していない。官吏は戒めよ¹⁵」とある。また婿をいれる結婚（贅婿）は否定され、異姓の婿は岳父の財産を継承できないとされていたが、実際には行われ、そのために「風紀が乱れ、訴訟が増した」とある¹⁶。元代に婚姻の礼を規定するにあたり、至元八年九月、尚書省、禮部の呈に、人倫の道を契勘するに、婚姻もて大とす。即今聘財・筵會、已に定例有るの外、扨門一節に據ては、女真の風俗に係り遍行されれば、合に革去に屬するべきの外、漢兒人の舊來の體例に據ては、朱文公家禮内を照得し、婚禮、酌古准今し、各項事理を擬したり。と、「朱子家禮」を参考にするも、「昔を参考にするも、現在の事情を鑑みて」制定すると言う。その上で贅婿については、

一、目今、作贅召婿の家往往にして甚だ多し。蓋し貧窮にして娶婦する能わざればなり。故に作贅せしむ。

古禮に有らずと雖も、亦革撥し難し。此等の家、合に權に時俗により行わしむ¹⁷。

の一条が設けられ、贅婿は本来の婚姻の形態でないが、貧家では必要であると認めている。「唐律」で決められていた家族法はいわゆる庶民とでも言われる人々が守ることは困難であり、支配者もそれを認めていたと考えられる。それ故に元代の法や律が「唐律」よりも弛緩したのはただ北方民族の慣習の影響によるだけであらうかとの疑問が生まれる。

それでは本稿が焦点を当てる収継婚について金代ではどのように扱われたか。「漢人や渤海人は、兄弟の妻が服喪を終え、一旦実家に戻った後に、礼をもって夫の兄弟があらためて娶ることを許す¹⁸」とある。これは女真人の法に沿うが、一旦は実家にもどし、改めて結婚をするという形式を取るところは漢族の慣習に配慮した

ためであろうか。

かつて私は、『通制條格』・『元典章』に見られる「唐律」で違法とされるような判決が多いのは既成事実を重視したためであり、それはいわば庶民とも言える社会は「唐律」を守れる情況になく、厳格に要求できなかったと解釈した。しかしその要因について示さなかった。本稿では収継婚を取り挙げ、それを生みだしているのは何であるかを言及したい。

二 収継婚に関わる法の変遷

『元典章』・『通制條格』・『元史』から収継婚に関する法や判例を年代を追って挙げることから始めたい¹⁹。

1 至元六年 出舍女婿として迎えた夫が養老期間の期限が終わる以前に死去したので、夫の弟が妻を収継し、家業に従事させる²⁰。

出舍女婿とは妻の家とは別に住まうが、取り決められた期間、妻の家の家業及び差役などに従事する婿である²¹。本件では期限前に夫が死亡したので、弟に残りを全うさせるべき収継させた。

2 至元七年七月 漢人は甥と伯叔父の妻の結婚は本俗法により禁止²²。

3 至元七年八月 漢人の収継婚を禁止。

この法が出た発端は、夫の死後、守服し、再婚することを拒否しているにもかかわらず、婚家では義弟と結婚させようと、実家に帰そうとしないということで実家が訴えたことから始まった。ここには二例があげられて

いるが、この頃、収継が少なからずあったようである。しかし元朝になりその是非が問われたのであろう。漢族や渤海族は旧例では同族のものが収継することが禁止されているとし、収継を求める訴えは却下され、妻が守服の期間を終えていれば実家に戻ることを認めた。さらに各地にこの禁止例を通曉させるために「出榜曉諭」させた²³。

1-3が下された時期は至元八年の法を作成していた時期である。八年以前に制定されているが、八年の法に含まれたと見てよいだろう。

4 至元八年十二月 父の妾や嫂（兄嫁）を収継せよ²⁴。

これは3の法に対するモンゴル人からの問い合わせを受け、世祖が3の法を撤回したものである。3の法には明確に漢族・渤海族のみに収継婚を禁じており、モンゴル民族を含んでいない。何に故にモンゴル人が中書省に漢族・渤海人に限っていた収継婚禁止について訴えたのかは不明である。至元八年の法の公布後の十二月に出ているところから、制定された法の確認の中での疑問であったとも思える。ともあれ世祖は彼らの訴えを聞き入れ、「父の妾と嫂との収継婚をせよ」と詔をした。この詔にしても、そもそも漢人・渤海人に言っているのか、あるいは本来はモンゴル人のみを対象にしていたのかも不明である。また「収継せよ」とは義務なのか、単なる許可なのかも判断しにくい。しかしその後の判例を見る限り、義務でもあるかのごとくに扱われている。モンゴルの政権は民族の風習を守ることを容認する一方で、イスラム教徒が太祖の生誕の祝いの席などでモンゴル人が捌いた羊を食せぬとしたときに、「誰が捌いたものも食せよ」と命じている²⁵。同じように収継婚拒否に関わる裁判での漢族の態度に不快感を持ったということもありえよう。なお詔では父の妾と兄嫁を収継するこ

とに限定し、兄が弟の妻を収継することは省かれている。モンゴル語では兄嫁と弟嫁は同じ言葉であるがその相違を知って漢訳されたのかはわからない。しかしモンゴル社会では本来、上から下を娶ることはないとも言われている²⁶。

5 至元九年十月 主婚者たるべき者がほかの結婚を取り決めているなか、兄嫁と密かに結婚し、出奔したが、罪とせず、結婚を有効とする²⁷。

「唐律」に、たとえ卑幼が家から離れていても基本的には、結婚については尊長に従い、それを違反すれば杖百の刑を下す、というものがある²⁸。元代でも、父が亡くなった後、主婚者は母か兄かで問題になった判例、夫が遠方に居るときに、妻が取り仕切った結婚を有効にするか否かが問題になった例がある。子が祖父母・父母などの主婚者をたてずに結婚をすることは違法とし、その結びつきは姦とされた²⁹。本件は、主婚者が兄嫁の再婚を決めていたにもかかわらず、弟と兄嫁は出奔し、結婚した。本来ならば主婚者が決めた結婚を優先し、その上に姦通の罪になるべきであるが、4の法を根拠にそれは問われていない。

6 至元十年三月二十二日 成婚³⁰前に夫が死んでもその弟に収継の権利がある。本件でも4の法を挙げ、弟に収継する権利があるとする³¹。

7 至元十年五月 定婚するも聘財が支払われる前に夫が死亡したが、弟に承継の権利があるので、未払いの聘財を支払い、収継させる。

弟が成婚年齢より前の十二歳のために兄嫁の家では新たに別の家との結婚を決め、聘財を受け取ったがそれを解消させ、収継を優先させた³²。

8 至元十年六月 弟の家と別居し、かつ差役の義務も別に行われている時は弟でも収継の権利を認めない。本件ではそれに加えて兄嫁の守節の意志が硬いこと、成人した子がいたことで収継を認めない³³。

9 至元十年 守服している兄嫁を強姦した妻帯の弟だが、収継の権利を認める。

守服している兄嫁を父母（兄嫁にとっては舅姑）の留守に強姦する。その後、舅姑は実家に帰ることを許しているにも拘わらず、弟には収継の権利があるとされた。判決に「強姦され、汚れた」ことも理由に挙げ、さらには4の法を根拠にする³⁴。

10 至元十年 兄嫁を収継した後に定婚していた妻と成婚しても重婚の限りではないとする。

収継婚については4の法を根拠にし、それを優先にするためには重婚すら認める。訴えの中には収継が兄嫁にとって服喪中であつたことに対する断罪要求もあつたが、それについては主婚者に従つたためとし、また主婚者もこれについて罪を問われない³⁵。

11 至元十二年四月 兄は弟の妻を収継したために奸罪とし、杖八十七、妻は笞五十七とする³⁶。

12 至元十三年三月 兄嫁が守節することを望むならば承継できない。ただし後に守志せず収継者以外と再婚をすれば断罪にする。

本件では、承継婚の4の法と至元八年二月発布の守節に関する法とを比較し、後者を優先した³⁷。

13 至元十四年正月 収継すべき義弟とは年が離れ、また兄嫁は義弟を幼いときから育てたので、収継をしないことを許す³⁸。

14 至元十六年二月 養老女婿の婿が年限以前に死んだが、弟はすでに結婚しており、収継できない³⁹。

15 至元十六年六月 兄が死亡したため兄嫁を収継し、約束していた結婚は解消する⁴⁰。

16 至元十六年十二月 夫が死亡したのは定婚はしたが成婚前であるので弟に収継させない⁴¹。

17 至元二十六年六月二十七日 戸籍上同戸であつても異姓の親属には収継の権利はない⁴²。

元朝では、軍戸などある種の戸は共同で軍役を行うために必ずしも同姓でない戸が一戸として扱われていた。これを合戸という。この判例では母方の親族と合戸していたようである。しかし同姓でないので収継の権利がないとした。

18 大徳五年十一月 女婿が死んだ後、その弟の収継を許さず、ほかから壻を迎える⁴³。

19 大徳八年五月 モンゴル軍の軀（奴隸）であつても漢人は伯母を収継してはならない⁴⁴。

20 至順元年九月己亥 収継については本俗に従う⁴⁵。違反すれば杖八十七、主婚者は笞五十七、媒合人は笞四十七とし、聘財の一半は官が没収し、その半ばを告発人に与える⁴⁶。

『元史』『刑法志』に「漢人・南人は父が没し子其の庶母を収し、兄没し弟其の嫂を収するは、之を禁ず⁴⁷」及び「姑表・兄弟の嫂叔相収せず。収するは姦を以て論ず⁴⁸」とあるのは、この至順元年の規定に基づいている。

以上、『元典章』・『通制條格』を中心に収継婚に関わる規定（判例）を時代を追ってみた。次に変化の時期を検討したい。

三 収継婚法の変化

多くの研究者も指摘するように、至元十三年頃から収継婚を規制する傾向が強くなっているのが見られる⁴⁹。至元八年に世祖の詔により小母（実母以外の父の妻）・兄嫁の収継は許可されたにも関わらず、収継が可能か否かで問題が起こるのは、至元七年に一旦は漢族には禁止され、しかも「出榜曉諭」をしていたからであろう。収継婚は漢人官僚や知識人には許しがたかったであろうが、理由はどうであれ、この時期に収継婚に関する判例が少なからずあるのはその是非が曖昧になっていたことも一因であろう。

両家の間で収継するか否か争われる裁判では、はじめは世祖の詔を義務あるいは命令と解釈し、各種の忌避する条件（守節、義弟との年齢差、義弟が妻帯していることなど）は無視された。しかし次第に収継婚に限定を設け、さらには禁止の方向に判例が移行する⁵⁰。漢族の婚姻は、定婚（婚約）と成婚（実際の結婚）の手順を踏む。定婚だけでも婚姻関係が成立し、夫・妻の関係が生まれたとし、時に貞節が強いられる。定婚後に夫が死亡した時にも一生守節する者がいるのはそのためである。多くは定婚の段階で聘財も支払われるが、収継婚を成立させるためか、7では未納であつてすら婚姻関係が結ばれていると見なされた。6・7に見るように至元十年頃は定婚さえしていれば、弟の権利はゆるがなかった。しかし16に見るように至元十六年には、定婚だけでは弟の収継の権利を認めない⁵¹。

子は父母、妻は夫を天と仰ぎ、それを表す行動の一つが死後に喪に服することである。その間（服内）は慶事を行つてはならない。しかし10（至元十年）の判例では、訴えた側が服内における収継であることを指摘して

いるにも関わらずその点に関しては判決に影響しない。一方、息子が死んだ後、同姓の甥を養子にし、息子の妻を収継させ、子供を設けた至元二十三年の事件では結婚は無効として別れさせた⁵²。

漢族の社会では妾を持つことは容認されたが正妻を迎える場合にはしかるべき形式を踏み、一人であることが原則であった。それにもかかわらず、10（至元十年）に見る判例では収継婚を優先させ、さらには定婚しているというだけで、成婚させ、重婚よりも世祖の聖旨を重視した。しかし至元十六年（14）及び大徳四年十月の判例⁵³では収継の義務よりも重婚罪のほうを重視した。

元代では守節を特に奨励したと言われている⁵⁴。とはいえ至元八年二月に出た「婦人が服闋し、守志することとを許す⁵⁵」とあるように、それを命じているわけではない。9（至元十年）で守節している兄嫁を強姦してもそれは不問に付されているのは、収継の権利のみが判断の基準であったからであろう。しかし延祐五年二月六日に出された判決では、収継を忌避する兄嫁を実家から引きずり出し、強姦した者に刑を下した⁵⁶。また12（至元十三年）では守服の意志を第一に尊重するが、もしその後、収継権利のあるものをさしおいて再婚すれば断罪すると一札を入れている⁵⁷。ところが大徳五年十一月（18）になるとそもそも弟と収継させず、新たに婚姻関係を結べと言⁵⁸、収継そのものを否定した判決になった。

大徳八年（19）には、蒙古軍の駆である者が伯母を収継しようとしたことに対して、モンゴル軍の駆であっても漢人である以上は甥が伯母を収継することは倫理上よろしくない、と禁止した⁵⁹。伯母を収継することの禁は早くも至元七年に禁止され、これに関する判例が見えないのはほとんど問題になっていなかったと思われる。しかし収継が慣習であるモンゴルの社会にいた漢人の間では行われていたのである。この時期になっ

て法をよりどころに漢人の風習を守るべきとの判決を下すに到った。

至元十三年頃から、収継の権利がある弟が幼いとの理由を初めとして、収継婚を避けるための条件が現れ、大徳年間には積極的に禁止する法が出た。至元十三年に宋朝が滅び、多くの宋朝の官僚・知識人が元朝政府の周辺に集まったこともその一因と思われる。もともと世祖のもとで法を制定したのは漢人儒者官僚が中心であった。その多くはモンゴル時代に新たに北方に伝わってきた新儒学信奉者（楊惟中・許衡・姚樞など）であり、彼らはその教育及び浸透に意欲的であった。そのためか新儒学の理念が積極的に取り入れられた。朱熹「家礼」を婚姻法の基準にし、また郷村に社制をしき、そこに社学や公的な媒酌人を置いた。そのようにして「唐律」に見られる家族法を基準にした思想の普及に努力した。このような思想界にとって新たに加わった旧宋朝の官僚及び知識人との交流は力を得たことであろう。世祖の時代にはその収継婚容認の詔を否定できないながらも拒否し得る条件をもって忌避し、次の成宗の時代にはさらに禁止に向かったと見る。

大徳七年（一一三〇三）に出された鄭介夫の上奏一綱が残っている。そこで漢人に対する収継婚禁止も訴えている⁶¹。この上奏がどのように受け入れられたのか不明であるが、翌年に漢人軍駆の収継婚禁止法がでたことはひとつの成果であろう。

その後、儒学的な素養のある皇帝の時代には漢人の理念にそった法が発令されはじめた。たとえば仁宗は即位するや至大四年六月に「命婦は庶民とは違うのであるから」と、再婚を禁止した⁶²。また先に見た収継婚の禁止令がでたのは同じく儒学に傾倒した文宗の時代であった。この頃は一方ではモンゴル人に対してはその習俗を守ることを強い、あるいは元統二年（一一三三四）には漢人がモンゴル文字を習うことを禁じている。皇帝

の漢化政策に対抗するかのように、モンゴル人と漢人の別を明確にしようとするモンゴル官僚の民族意識が強化された。それが漢人儒者を後押しした形になったようでもある。

四 聘財のあり方

見てきたように収継婚の禁止に向け、漢人官僚は努力した。しかし「唐律」を基本にした宋代でも夫の死後その兄と結婚した例が見られる。我が子を棄てたなどの罪を問う判例であるが、収継婚をしていたことについては批判の対象になっていない⁶³。このような例がある事から金代や元代における収継婚の許容を北方民族の影響からとのみ言いきれない。それでは漢族の社会が許容する要因はどこにあるのか。収継婚が許される範囲から探ってみたい。

実弟でありながら兄嫁を収継できない条件は、弟がすでに結婚していること、兄嫁との年の差、兄嫁が守志の決心をしていることのほか、兄と弟が別籍であることが挙げられる。一方、同籍であることをもって収継婚の権利があるとされた。すなわち8（至元十年六月）の判例では、収継を忌避できる条件として、兄嫁の守志が固いこと、三十六歳の子がいること、五十歳の高齢であるとともに、「劉阿馬・劉珪は二つの戸で、別居して差にあたる」と言う。別に住み、差役を別に行っていると言うことは公的にも別生計の戸として扱われていることである⁶⁴。

12（至元十三年三月）では守志の意を優先するが、一方では「韓進は兄韓大の差発を承継する」と、兄の差

発義務を受け継いでいることをもって収継の権利があるとの一札を入れる⁶⁵。差役を受け継ぐと言うことは同籍同居であり、それが収継婚の権利に結びついている。

1 (至元六年) は、十七年の期限付きで妻の家の生活を支えるために迎えた女婿に対する実弟の収継問題である。兄は自らの家を離れ妻の家の業を行っているということは、実家にすむ弟と家計を別に行っていることになる。しかし判決は「劉瘦漢の弟劉鍵鍵は許徳（兄嫁の父）の家で、その兄嫁迎仙を収継せよ」とあり、兄が残した期限を全うさせることを命じた⁶⁶。当時は金朝の支配下から解放され、新しい政権になったが、判決には旧例すなわち「唐律」を参考にしていた時期である。そこで収継婚を促す判決が出たのは何故であろうか。妻の家は軍役を課せられた軍戸である。元朝ではある種の役を課する戸数を維持するために世襲にしていた。軍戸もその一つである。それ故に戸の維持を目的として収継の権利を認めたともとれる。しかし出舍女婿として妻の家に入った婿も実家で家産分割を行うときには受け取る権利があった。すなわち同じ生計下にある兄弟と判断されていたからであろう。

大徳二年に、遠房の弟（同輩の従兄弟）には収継を認めない判決が出ている。実弟がその権利を放棄し、兄嫁をすでに実家に返しているので彼には収継の権利はないと言う⁶⁷。すなわち収継の権利を施行するか放棄するかの特権は同じ家計の弟であった。また出家していた弟が還俗して収継しようとしたが許されていない。出家をすると経済的な地盤が寺に移ったからであろう⁶⁸。

なぜ同戸の弟だけに収継の権利を認めたのであろうか。収継婚の背景に経済的問題を指摘する研究者も多い⁶⁹。しかしどのような経済的な仕組みかは検討されていない。前近代の漢族社会では婚姻は聘財を介して結

ばれる。主婚者は両家の祖父母・父母などその家の責任者たるべき者であった。聘財を介しているところから婚姻が両家の経済的交換ともとられてきた。元朝の「嫁娶聘財體例」に「庶人の上戸は百貫、中戸は五十貫、下戸は二十貫を夫側から妻側に送る」とある⁷⁰。一方、女婿を家に迎える場合には、規定の半額にし女家から男家に送られる⁷¹。聘財の規定は上限を設け、過剰になることを防止するためであったが、実際には聘財が高騰し、それが収継婚を生んだ原因のひとつと指摘されている⁷²。

収継できる範囲が同一生計にある弟に限られていたのは聘財のあり方に関わるからではないか。7（至元十年五月）によると、定婚したが、まだ正式な聘財を支払っていない場合でも結婚と認め、聘財の未払い分を支払わせるが、新たに弟と成婚するための聘財は支払われない。また年の差で収継しなかった時、「崔恵の名のもとで受け取った聘財を返し、路四兒が成人になり、別に妻を娶る時の聘財とせよ⁷³」と、聘財を返し、弟の結婚に際しての聘財にすることにし、両家の婚姻関係を解消させた。女婿の場合も同じで、成婚前に夫が死んだが収継の権利のある弟はすでに結婚していた。そこで妻家から送られた聘財をかえし、定婚を解消せよとある⁷⁴。すなわち聘財は一人の男と女の結婚のために支払われるというよりも両家の間の結婚とみて、弟がいる限り継続しており、聘財の効力があつたと解釈されたと考えられる。

このように聘財は両家が婚姻関係で結ばれている間のある種の保証金の意味合いがあつたと推察される。「嫁の実家は贈った聘財物を焼いたのに弁償しない」と怒り、嫁をいじめ殺した事件があつた⁷⁵。それは聘財の所有権が完全には妻側に移っていないことの一つの証である。結婚が破綻したときには夫側に落ち度がない限り返却するものであつた。兄弟が別戸で生計を異にしていれば、聘財の出所が別ということで収継の権利がなく

なる。たとえ兄の結婚が別戸になる前であっても、財産が分割される時にはおそらく聘財が支払われたことも考慮されているために弟に収継の権利がなくなるのであろう。

このような聘財の存在は、聘財が焼失したために殺害された妻の例を見るまでもなく、妻にとっても収継拒否を難しくした。定婚したが成婚前に夫が亡くなったときに、妻の側が承継者がいなか否かを問うのはそのためであろう⁷⁶。夫が死んだために妻が実家に戻る場合には聘財の返却問題が起きるからである。至元十二年三月に戸部から中書省に送られた文書に、「七十五両の聘財を受けた妻であるが、夫が死んだ後に七十五両を出し、実家に戻した⁷⁷」とあり、聘財は実家に戻る時に返却した。この場合には収継するべきものが居なかったので返却し、両家の結婚を解消した。

婚姻関係を結ぶと言うことが両家にとつての経済的な面がぬぐえないことは、金銭や物品の交換だけではない。女婿の場合には、終生か期間限定かはあるが、妻の家の経済活動を担うことである。嫁に行った妻も同じように働き手として認識された⁷⁸。夫に対する妻の服喪期間は三年である⁷⁹。帰宗の条件として守服期間が終わっていることを問題にするだけでなく、時に服喪期間が四年、五年と言う記述がある。おそらくは服喪期間及びそれを越えて夫の家にいるのは聘財返却の必要がなくなるための聘財額に相当する労働力提供とでもいえよう。またその間は嫁に他家との再婚を強いることも舅姑のある種の権利であった。

妻が実家から持ってきた粧奩財について少しく触れたい。夫の死後、帰宗させる際に実家から連れてきた侍女も取り戻そうとする実家と婚家が争う事件がある。結局は侍女の値をはかり、三分の一の価格を嫁に与え、帰宗させると結審する⁸⁰。この場合は、この妻はほかに粧奩財を持っていなかったようであるが、それでも侍

女の価値として三分の一相当を取り戻している。このように婚姻に関しての資金・物品の所有の権利が争われるのも婚姻が両家のある種の経済的行為となっていたからであろう⁸¹。このような経済的仕組みが収継婚を認めざるを得ない状況がつづいたのではなからうか。

おわりに

元代に収継婚がなされていた理由としてモンゴル族の習俗に染まっていたからといわれてきた。世祖の詔「父の妻や兄嫁を収継せよ」が収継婚を広めたことは見てきたとおりである。官僚や知識人は「唐律」の家族法こそが漢族の規律であり、漢族の文化の表象とした。漢人官僚は世祖の詔に抗うように、裁判を通じ、守節・重婚の否定などの規律を盾に収継婚を避けようと努力した⁸²。モンゴル政権に地位を得た漢族官僚の抵抗が明代以降の「唐律」の復帰に寄与したことは疑いない。しかし一方で、いわば庶民の生活の中には「唐律」が掲げる家族規範を守れない事情を抱えていた。そのひとつが結婚に伴う聘財の存在であった。あくまでも結婚が両家の間の契約であり、その保障としての聘財があるところに収継婚の存在を許す要因があったと推定した。同一生計下の財（労働力を含め）交換という觀念が収継婚を導いたと見る。そうであるからこそ取り締まる官僚もそれを容認せざるを得ないとして、おおかたは看過せざるを得なかった。また社会構造が大きく変化がない限り収継婚の存在は続いたと考える。

1 注 漢族で言われる孝・節の強要、尊卑・男女の別、婚姻法に係わる諸規定などを、どのような儒学理念から導き出されてきたかを問うことなく私は儒学理念と表現してきた。ここでは、「唐律」の規定とのみ定義しておく。

2 元代における収継婚に関わる論文は多くある。註で扱ったほかに洪金富「元代的収継婚」(『中国近世社会文化史論文集』中国歴史語言研究所、一九九二年) Bettine Birge, *Marriage and the Law in the Age of Khubilai Khan, Cases from the Yuan dianzhang*, Harvard University Press, 2017. などとも参考にした。

3 「唐律」卷十四、「戸婚」諸嘗爲祖免親之妻、而嫁娶者、各杖一百。總麻及舅甥妻、徒一年、小功以上、以姦論。【疏】議曰、高祖親兄弟、曾祖堂兄弟、祖再從兄弟、父三從兄弟、身四從兄弟…即是祖免。

4 「唐律」卷二十六、「雜律」諸姦者、徒一年半、有夫者、徒二年…。諸姦總麻以上親及總麻以上親之妻…徒三年…。

5 「元典章」卷三十、禮部「喪禮」參照。

6 顧元「服制命案、干分嫁娶与清代衡平司法」(北京、法律出版社、二〇一八年)、二四六—二六四頁參照。

7 J. Holmgren, *Observations on Marriage and Inheritances Practices in Early Mongol and Yuan Society with Particular Reference to the Levirate*, *Journal of Asian History* Vol.20-2, 1986 は比較的詳細である。ほかに秦新林「元代収継婚俗及其演变与影響」(『殷都學刊』二〇〇四年二期)、龔恒超「蒙元時期漢人収継婚的法律調整」(『貴州社会科学』二〇〇九年七月)。
8 元代の法についての研究は多くあるが、この時期についてまとまっているものは、Paul Heng-chao Chen, *Chinese Legal Tradition under the Mongols: The Code of 1291 as reconstructed*, Princeton, New Jersey, Princeton University Press, 1979 である。

9 『元史』卷七、「世祖本紀」至元八年十一月乙亥…禁行金泰和律。建國號曰大元。

10 『元典章』卷十八、戸部「嫁娶聘財體例」至元八年二月…蒙古人不在此例。

11 『遼史』卷六十一、「刑法志」神冊六年(九二二)…詔大臣、定治契丹及諸夷之法、漢人則斷以律令、…至太宗時、治渤海人一依漢法、餘無改焉。

12 「唐律」卷十二、「戸婚」、諸祖父母・父母在、而子孫別籍・異財者、徒三年。若祖父母・父母令別籍及以子孫妄繼人後者、徒

三年、子孫不坐。

13 『元典章』卷十七、戸部、分析「父母在許令分析」、至元八年七月：舊例、女真人其祖父母・父母在日支析及令子孫別籍者聽。又條、漢人不得令子孫別籍、其支析財產者聽。…若依舊例、卒難改革、以此參詳、隨代沿革不同、擬合酌古准今、自後如祖父母・父母許令支析別籍者聽、違者治罪。

14 同右及び『通制條格』卷二、戸令「戸例」、至元七年八月：壬子年、合併抄上戸計、自願析居各另者、聽從民便…。

15 『宋会要』刑法二、乾德六年（九六八）六月十一日、詔曰、…近者西川管内及山南諸州相次上言、百姓祖父母・父母在者、子孫別籍異財、仍不同居。詔到日、仰所在長吏明加告誡、不得更習舊風。如違者、並準律處分。

16 同右、淳化元年（九九〇）九月二十一日、崇儀副使郭載言、前使劍南日、見富人家多召贅婿、與所生子齒、富人死、即分其財、貧民多捨其父母出贅、甚傷風化而爭訟、望禁之。詔從其請。

17 『通制條格』卷三、戸令「婚姻禮制」、至元八年九月、尚書省、禮部呈、契勘人倫之道、婚姻爲大。即今、聘財・筵會已有定例外、據拜門一節、係女真風俗、遍行合屬革去外、據漢兒人舊來體例、照得朱文公家禮內、婚禮、酌古准今、擬到各項事理。…一、目今、作贅召婿之家往往甚多、蓋是貧窮不能娶婦、故使作贅。雖非古禮、亦難革撥。此等之家 合令權依時俗而行。

18 『金史』六卷、「世宗本紀」、大定九年（一一六九）漢人、渤海兄弟之妻、服闋歸宗、以禮續婚者聽。

19 沈寿文「略析元初漢人收繼婚敵意法律實踐」（『雲南大學學報法學報』卷二一第六期、二〇〇八年）、何恬「蒙元時期漢人收繼婚問題再研究」（『珞珈史苑』二〇一九年四月）も年を追って整理しているが、論点も異なるためここで改めて詳述する。

20 本稿では資料は註に付記する。『元典章』卷十八、戸部「弟收繼出舍另居」、至元六年：係本縣附籍軍戸。至元三年三月内、召到劉瘦漢、於德女迎仙處作十七年出舍女婿、見有立到婚書、縁婿劉瘦漢未曾住滿年限、不曾令女迎仙前去、乞照詳事。省府今擬、令故劉瘦漢弟劉健健於許德家内收繼伊嫂許迎仙、出舍另居。

21 『通制條格』卷二、戸令「戸例」に、至元八年三月、一、招召女婿、養老女婿、妻（補う）亡出舍另居、自行娶致妻室、却稱津貼丈人戸下差發、或納本投下差發之人。仰收係當差外、據丈人出備財錢、別行求與妻室、及分訖事産津貼者、依舊同戸應當差役とあり、養老女婿が妻の死後再婚しても女婿としての関係を続ける限り前妻の家の家業に当たることが記されている。

22 『元典章』卷十八、戸部、不收繼「姪兒不得收嬌母」至元七年七月：舊例、姪男娶訖嬌母、即是期（欺改め）親尊長爲婚、同姪、

法各離。…舊例、同類自相犯者、各從本俗法。其漢兒人等不合指例、比及通行定奪以來、依准本部所擬、無令接續。

23 同右「漢兒人不得接續」至元七年八月…送法司檢詳得舊例、漢兒・渤海不在接續有服兄弟之限。移准中書省咨、議得、舊例、同類自相犯者、各從本俗法。其漢兒人不合指例。比及通行定奪以來、無令接續。若本婦人服闋、自願守志、或欲歸宗改嫁者聽。咨請照驗。省府除已割付戸部、遍行各路、出榜曉諭外、仰依上施行。

24 『元典章』卷十八、戸部、收繼「收小娘阿嫂例」至元八年十二月、中書省、今月初八日、答失蠻・相哥二個文字譯該、小娘根底、阿嫂根底、休収者。行了文字來。奏呵、聖旨、疾忙交行文書者。小娘根底、阿嫂根底収者。麼道、聖旨了也。欽此。

25 『元典章』卷五十七、刑部、禁宰殺「禁回回抹殺羊做速納」至元十六年十二月二十四日 成吉思皇帝降生、日出至沒、盡収諸國、各依風俗。這許多諸色民內、唯、有回回人每爲言、俺不喫蒙古之食…如今、直北從八里灰田地裏將海青來底回回每、別人宰殺來的俺不喫、麼道、騷擾貧窮百姓每來底上頭、從今已後、木速魯蠻回回每、朮（木改め）勿回回每、不揀是何人殺來的肉、交喫者。

註19 何論文一三三頁參照。

26 『元典章』卷十八、戸部、婚姻、收繼「小叔収阿嫂例」至元九年十月…相從於至元八年十月初八日通奸。在後得孕、一同在逃罪犯。…省部照得至元八年十二月欽奉聖旨節該、小娘根底、阿嫂根底収者、麼道。

28 「唐律」卷十四、「戸婚」諸卑幼在外、尊長後爲定婚、而卑幼自娶妻、已成者、婚如法、未成者、從尊長。違者、杖一百。

29 『元典章』卷十八、戸部、婚姻、嫁娶「母在子不得主婚」、「通制條格」卷三、戸令「嫁娶所由」參照。

30 結婚の取り決めが整うことを定婚と言ひ、實際に結婚をし、相手の家に入ること成婚、あるいは過門と言う。

31 『元典章』卷十八、戸部、婚姻、收繼「定婚收繼」至元十年三月二十二日…終是已定妻室、亦合欽依聖旨小叔収阿嫂事理、接續施行。同右「定婚夫亡小叔再下財求娶」至元十年五月…又兼郭阿秦止是下乞欄媒、定親之後、不會行下正財。…令郭阿秦貼下元義財物、依理求娶李蛾兒、與伊男冬兒接續。

33 『元典章』卷十八、戸部、婚姻、不收繼「兩戸不得收繼」至元十年六月、…府司議得、劉珪所告收嫂一節、劉阿馬、劉珪兩戸別居當差、阿馬年五十歲、自願守志不嫁、況有男劉丙三十六歲、難以收繼。係已久爲例事理、乞照詳。本部相度、既是劉阿馬狀告自願守志、況已有男侍養、又兼兩戸別行當差、准擬無令收繼施行。

34 『元典章』卷十八、戸部、婚姻、收繼「叔收兄嫂」至元十年…牛望兒雖欲恩養兒男守志、其付望伯已將本婦強要奸汚、況兼付望伯係牛望兒亡夫親弟、欽依已降聖旨事意、合准已婚…

35 同右「叔收嫂又婚元定妻」至元十年…即係欽奉聖旨內一款、小叔合行接續收繼、難同有妻更娶妻體例。合准以此爲定、令小叔劉三將阿郭收繼、仍將元定妻胡茶哥依理下財、求娶爲妻。

36 『元典章』卷十八、戸部、不收繼「兄收弟妻斷離」至元十二年四月…送兵部、擬得、田大成奸收弟妻、廢絕人倫、實傷風化、量情擬斷八十七下、罷見識。阿趙擬斷五十七、與大成離異。また十四年八月に下された例で、杖一百七、九十七とある。量刑の相違はどこにあるかを示す事情は示されていない。

37 同右「守志婦不收繼」至元十三年三月…至元八年二月内欽奉聖旨條畫内、一款節該、婦人夫亡服闋、守志者聽。其舅姑不得一面改嫁。又至元八年十二月十四日欽奉聖旨節該、小娘・阿嫂根底收者…今後、似此守志婦人、應繼人不得騷擾、聽從守志。如却行召嫁、將各人斷罪、更令應繼人收繼。『通制條格』卷三戸令「夫亡守志」至元十三年三月は同じ。

38 同右「抱乳小叔不收繼」至元十四年正月初九日…據亡男婦阿徐既是守服已闋、及曾將小叔駒虞從小乳抱、又兼年甲懸一倍、不願接續。況徐旺年老孤獨、別無兒女侍奉、難議收繼。年齢が離れているために收繼拒否が許された例は、同「嫂叔年甲懸不收」にも見える。

39 『通制條格』卷三、戸令「收嫂」至元十六年二月…伊弟李五驢、欲行收繼、貼住年限。其李五驢已於牛三家作婿、似難收繼。同右、至元十六年六月…張羊兒既將伊嫂收繼、若又與楊春兒作婿、即是有妻再娶、擬將元下銀絹回付、令楊春兒別行改嫁。

40 同右、至元十六年十二月…路重興與崔勝兒未婚身故、難議收繼。

41 『元典章』卷十八、戸部、不收繼「姑舅小叔不收繼」。至元二十六年六月二十七日…即係一戸兩姓姑舅成親。不曾經斷此例『通制條格』卷三、戸令「收嫂」大德五年十一月…其房弟王安傑要行收嫂。禮部議得、凡人無後者、最爲大事。其趙胤初因無嗣、與女召婿養老。不幸婿死、賴有伊女、可爲依倚、合從趙胤別行召婿、以全養老送終之道。

42 同右「收繼嫡母」。雖係蒙古軍驅、終是有姓漢人、姪收嫡母、濁亂大倫、擬合禁止。

43 『元史』卷三十四、「文宗本紀」至順元年九月己亥、諸人非其本俗、敢有弟收其嫂、子收庶母者、坐罪。

44 『至正條格』卷八、斷例 戸婚、禁收庶母并嫂 至順元年九月二十三日、中書省奏、御史臺備着監察每文書、俺根底与將文書來。

漢人歿了哥哥、他的阿嫂守寡、其間兄弟每收繼了多有。似這般呵、体例裏不厮似一般有。如蒙定擬通例禁治的、与將文書來的上頭、教礼部定擬呵、今後漢人・南人收繼庶母并阿嫂的、合禁治、廢道、定擬行有。依他每定擬的、教行呵、怎生、奏呵、奉聖旨、那般者、欽此、刑部議得、今後似此有犯男子・婦人、各杖捌拾柒下、主婚者答伍拾柒下、媒合人肆拾柒下、聘財一半没官、一半付告人充賞。雖會赦猶離之、都省准擬。

47 『元史』卷一〇三、刑法志「戸婚」諸漢人・南人、父没子收其庶母、兄没弟收其嫂者、禁之。

48 同右、諸姑表兄弟嫂叔不相收、收者以姦論。

49 李淑娥 魂簇「論蒙元時代的收継婚与其法例」(『法制与社会發展』一九九七年二期、五四・五五頁、註19 沈寿文論文、二二頁。

李鈺「元代收継婚制度評述」(『広州社会主義学院学報』二〇一〇年三期) 六二頁、蘇麗娜「元朝收継婚的法律調整」(『江西社会科学』二〇一二年第八期) では收継婚の扱いを三期に分ける。

50 註7 Hohnsreen 論文一七八―一八四頁、註19 何論文一四二頁参照。

51 『通制條格』卷三、戸令「收嫂」大德四年十月の判例も同じ。

52 『元典章』卷十八、戸部、婚姻、服内婚「停屍成親斷離」大德二年…王仲禄男王猪僧、至元二十一年十二月三十日、娶到賀眞眞爲妻。至元二十三年正月内、王猪僧身死、停屍在家。王仲禄却過房到王仲福男王唐兒爲男、令王唐兒與賀眞眞拜訖王猪僧屍靈、收繼成親。…收繼之後、已有所生兒男。…斷令各人離異。

53 註51 参照。また『通制條格』卷三、戸令「收嫂」大德四年十月…李四十係父母所生小叔、雖有妻室即係應繼之人、禮部議得、劉乖乖雖是定婚、未曾過門、其李四十已有妻室、二者俱難收繼。

54 酒井恵子「孝子から節婦へ―元代における旌表制度と節婦評価の転換」(『東洋学報』八四卷四号、二〇〇六年)

55 『元典章』卷三十、戸部、不收繼「守志婦不收繼」至元十三年三月…至元八年二月内欽奉聖旨條書内一款節該、婦人夫亡服闋、守志者聽。

56 同右 收繼「田長宜強收嫂」参照。

57 註37 参照。

58 註43 参照。

註44参照。

なお『明宣宗実録』卷五一、宣德四年二月丁酉に、收継婚を初めとした家族法に關係する規定の遵守を命じており、末尾に「若武官及其子弟有犯此者、不許復職承襲。永爲定制」と付記されていることから、奥山憲夫氏は、「武官には元朝時代から引き継いでいる者が多く、そのために收継に対して一般の人よりも禁忌感が薄いためではないか、あるいはその血筋にはモンゴル系であることも多かつたためにこのような違法行為が多かつたのではないか」と言われる（口頭発言）。

『歷代名臣奏議』卷六七、一厚俗 古者、叔嫂不通問、所以別嫌疑、辨同異。今有兄死未寒、弟即收嫂、或弟死而小弟復収、甚而四十之婦而歸未冠之兒。…除蒙古人外、所宜截日禁斷、有兄亡而嫂願改志及守志者、並聽。如収以爲妻、則以同奸罪更加一等。

『至正條格』断例、戸婚、「即與庶民妻室不同…不許再醮」

『清明集』十人倫門、亂倫「弟婦與伯成姦且棄逐男女盜賣其田業」参照。

註33参照。

註37参照。

註21参照。

『通制條格』卷三、戸令、「收嫂」大德二年十二月…禮部議得、于貧兒已經服闋、小叔潘三許令歸宗、遠房小叔潘五似難收繼。同右、元貞二年三月…李福証既是出家僧人、擬准已婚、令張保奴（兄嫁）與趙明之爲妻。

註6・7・19参照。

『元典章』卷十八、戸部、嫁娶「婚禮」至元八年二月の聖旨。

『通制條格』卷四、戸令、「嫁娶」至元八年七月…一、招召養老女壻、照依已定嫁娶聘財等第減半。須要明立媒約婚書成親。

慈華「元代女婿改嫁現象芻議」（『文学研究』二〇一七年）四七頁。

『元典章』卷十八、戸部、不收繼、「嫂叔年甲爭懸不収」、至元十八年…擬令於崔惠名下追回路頭元下財錢、候路四兒長立成人、別娶妻室。

『通制條格』卷三、戸令「收嫂」至元十六年六月…本部議得、張羊兒既將伊嫂収繼。若又與楊春兒作婿、即是有妻再娶、擬將

元下銀絹回付、令楊春兒別行改嫁。

75 『元典章』卷四十一、刑部、殺親屬「打死男婦」至元十三年六月始八日：不合先爲親家賀林遣火、將本家元與男婦物件燒訖、不肯陪還、以此挾恨。

76 『通制條格』卷三、戸令「収嫂」大德六年九月：令元媒本問李聚（亡夫の伯父）並無収繼之人：李犇牛身故、郭穩使元媒本問李聚、將女秀哥改嫁暴旺爲妻、經今四年。

77 同右「良嫁官戸」至元十二年三月：張得安身故、齋世榮自願出鈔柒拾伍兩（聘財と同じ金額）、収贖姪女粉梅歸宗：註49李鈺論文、六二頁。

78 『元典章』卷三十、禮部「喪禮」。

79 『通制條格』卷四、戸令「嫁娶」至元八年三月：沿房不曾斷送、止有從嫁奩名。已入夫家、依例合令男家驗元買值錢、參分爲率。尅分給付月哥歸宗。

81 粧奩財については、大徳年間に夫側に帰属する法ができる。

82 注7 Hohngren 論文一七八—一八四頁参照。